

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究生生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）
「郷土とことわざ」（人間の科学新社・共著）等

「イカを揚げる」

「今日はイカ揚げるぞ!」といっても、天ぷらの話ではありません。県内で行われる「イカ合戦」「タコ合戦」の話です。

水無月、旧暦の端午の節句の頃、旧白根市（現新潟市）、三条市、見附市今町と長岡市中之島で開催される勇壮な行事は、今でこそ「タコ合戦」の名で通っていますが、かつては「イカ合戦」「イカ揚げ」「イカ昇り」と呼ばれていたといいます。現に県央地域の古老は、「本来新潟は、イカじゃ。風揚げなぞ子供の遊びじゃ。こちとらは合戦じゃいくさじゃ、真剣勝負じゃ、オオゴトじゃ」という内容の来歴を口にします（本人匿名希望、記載共通語希望のためあしからず）。

では、なぜ、タコではなくイカか？タコもイカも同じようなものではないか？という向きもありますが、当時イカは上方語。江戸時代には畿内を中心に「イカ」、江戸では「タコ」と東西で呼び名が異なっていたといいます。方言の古い文献では「イカ」「イカのぼり」という語が、山陰、瀬戸内海、北陸地方の富山から新潟にみられます。新潟が西日本の文化の伝播地であったことが窺えます。

「いかめしい」「いかもの」「いかさま」「いかつい」「いかがわしい」等々「イカ」の付く語は「普段と異なるもの」「尋常ではないもの」「妙なもの」を示していますが、雄姿の舞う大空は、文字通り普段と異なる「イカもの」様の青空です。

戦国時代には軍の通信手段としても用いられたと言いますから、敵から見ても「すわ、一大事!」の

「いかもの」ものであったことでしょう。

さて、県内に伝わる各「合戦」の起こりは江戸時代、中之口川兩岸で旧白根と旧味方が、刈谷田川を挟んで旧見附今町と旧中之島が、そして三条では河川敷で旧村上藩の子と地元鍛冶屋の子の諍いがやがて行事になったと伝えられています。河川との闘いであった越後平野では、水利権や、各藩の輻湊等さまざまな事情で対岸との綱引きもあったことだと思います。地域の結束が節句の時期と相まって、諍いから、闘いへ、闘いから合戦の名の行事へと移り変わっていったことは、地域の人々の誇りともいえましょう。

と同時に、河川を挟んだ堤防の改修工事で、造成した堤防を安定させて強度を増すための地固めに、多数の人手というか人の足(!)が必要であったことから、合戦という一大行事を“当局”が考案したという説もあります。まさに、企画力・集客力で労力も解消のアイディアは、御上もなかなかのものです。

その昔、名古屋城の金の鯨銚を大風に乗って盗もうと企んだ大盗人が居たとか居ないとか。宙を舞う盗人搭載大風、なにかとモンダイのドローン、形態にしても名称にしても、いかめしいのは後者だと私は思います。

参考文献『全国方言辞典』
(東條操編)

註 タコあげの来歴は各地で諸説あります。

